



出雲康雅の会

おはなし

佐々木多門

狂言 文蔵

野村 萬

能 砧

出雲康雅

撮影◆神田佳明 シテ◆出雲康雅

平成二十九年二月四日〈土〉午後一時開場 午後二時開演
十四世喜多六平太記念能楽堂

入場券 正面指定席 10,000円 一階自由席 6,000円 二階自由席 3,000円 学生 2,000円

お申し込み・お問い合わせ

出雲康雅 Tel/Fax 03(3987)2044 十四世喜多六平太記念能楽堂 Tel. 03(3491)8813

出雲康雅の会

おはなし 佐々木多門

狂言

文蔵 シテ野村 萬

アド野村万之丞

能

シテ大島輝久

シテ出雲康雅

砧

ワキ宝生欣哉

ワキツレ則久英志

アイ野村万蔵

後見

塩津哲生

中村邦生

地謡

栗谷浩之 長島 茂

内田成信 栗谷能夫

狩野了一 友枝昭世

佐々木多門 栗谷明生

〔休憩十五分〕

〔文蔵〕

無断で旅に出て前夜帰宅した太郎冠者を主人が叱責すると、京都見物をし、主人の伯父を見舞つてきたという。主人は機嫌を直し何か御馳走にならなかつたかと尋ねると、太郎冠者は珍しい物を食べたが名を忘れたと答える。物にことよせて覚えていないかと問うと、主人がいつも好んで読む「源平盛衰記」の石橋山合戦の話に出てくる物を食べたと答えるので、主人はそのくだりを語り始める。主人が語り進めて「真田の与市が乳人（めのと）親に文蔵と答うる」というところになると、太郎冠者はその文蔵を食つたと答ふる。主人は、それは積尊出山の時、靈鷲山で師走八日に召された温糟粥（うんぞうかめ）のことであろう、温糟と文蔵の区別もつかないで主人に骨を折らせたと叱つて留める。

〔砧〕

九州の芦屋の某は訴訟のために上京して久しく、国元の妻は帰国を待ちわびている。三年目の秋、初めて帰国したのは侍女の夕霧一人だった。妻は夫の無情を嘆くが、せめての慰めに、里人の打つ砧を取り寄せて打ちながら、この音が我が思いを乗せて都の夫の心に通じるようにと念じるのだった。だが今年も帰国できないという知らせを聞き、妻は病となりついに命を落とす。

中人

帰国した夫がそれを知つて申うと、妻の亡霊がやつれ果てた姿で現れる。妻は恋慕の執心からられたまま死んだため、地獄に落ちていたのだが、いまだに夫を忘れられず、恋と恨みの半ばするやるせなさを夫に訴え、そのつれなさを責めるが、読経の功德で成仏する。世阿弥の晩年の自信作と思われるが、テーマ・作詞・作曲ともにすぐれた屈指の名曲である。

◇平成二十九年二月四日（土） ◇午後一時開場・二時開演 ◇十四世喜多六平太記念能楽堂

ご注意・お願い

- 演能中は、携帯電話・ポケットベルの電源をお切り下さいますようお願いいたします。
- 場内での写真撮影及び録音は禁止されております。
- やむをえぬ事情で、出演者が変更になる場合があります。
- お求めくださいましたチケットの払い戻しは、公演中止のほかは致しかねますのでご了承ください。

お問い合わせ

出雲康雅
〒171-0032
豊島区雑司が谷2-8-37
Tel.03-3987-2044

喜多六平太記念能楽堂
〒141-0021
東京都品川区上大崎4-6-9
Tel.03-3491-8813

会場案内図

